



■～「カンガルーケア」のはじまり～早産児に愛とぬくもりと母乳を～

「カンガルーケア」のはじまり

～早産児に愛とぬくもりと母乳を～

カンガルーケアとは、赤ちゃんを裸のまま母親の乳房の間で抱っこするケアのことで、'Skin to skin contact' あるいは '直肌の抱っこ' ともいわれています。最近では、生まれたばかりの赤ちゃんに対するカンガルーケアが注目されていますが、本来は新生児(未熟児)集中治療室などにおいて、早産した赤ちゃんなどの治療中に行われるものです。今回は、この未熟児に行われるカンガルーケアの歴史のお話です。(出生直後のカンガルーケアについては、2010年11月のサン・シャイン「[カンガルーケアってなあに?](#)」を参照ください。)



そのはじまりは1978年、南米コロンビアの首都ボゴタで新生児ケアにあたっていた2人の小児科医(レイ先生とマルチネス先生)が始めたものです。彼らの病院は、年間11,000件のお産をあつかうボゴタ最大の産科病院で、新生児集中治療室は常に定員オーバー、器材不足、スタッフ不足の状態でした。そのため、1つの保育器に2～3人の新生児を同時に収容することもめずらしくなく、例えば1人の赤ちゃんに感染症が起こるとあっという間に拡がって、感染症による新生児死亡がたくさんありました。また、当時のコロンビアはとても貧しい国で、このような赤ちゃんは早期の母子分離から母子間の愛着形成がうまくいかなくなって、容易に養育遺棄となってしまうことが社会問題となっていました。

これらに対して、レイ先生たちは、苦肉の策として出生体重1,500g未満の赤ちゃんを数日間だけ保育器に収容し、生まれたばかりの不安定な状態がおちついたら、オムツを1枚つけただけの格好で母親の乳房の間に立った格好で抱かせて、その上から衣服を着せて、保温と母乳哺育を行うようにしました。そして、赤ちゃんの様子が大丈夫だと判断されたら、体重に関係なく退院させ、院内感染から赤ちゃんを遠ざけるようにしました。赤ちゃんは常に抱かれた状態で、お母さんが疲れたらお父さんが抱いて、お父さんが疲れたらおばあちゃんが抱いて、の繰り返しです。栄養はもちろん母乳栄養です。彼らはユニセフの協力によって平日の午前中にクリニックを開いて、最初は週2回くらいの外来健診を行って、赤ちゃんが成長していったら徐々に受診回数を減らしました。もちろん、お母さんが不安なときは何時でも受診可能なシステムでした。そして、これらのシステムがボゴタの未熟児の死亡率の低下と養育遺棄の減少につながったことが、1980年代の欧州各国のテレビ番組で紹介されました。さらに1983年、おかあさんの胸に抱いて暖めているだけというお金のかからない方法で未熟児のケアが実現できるということがユニセフ白書で紹介されました。

実は、この頃の欧州の病院では、昔の日本と同じように母子別室が一般的で、それがその後の母子関係に悪い影響を与えることが指摘されていました。そのため、カンガルーケアの母子愛着形成のメリットが注目され、いろいろな病院の新生児集中治療室でカンガルーケアが試されました。その結果、

- ① 皮膚接触によって赤ちゃんの体温が保たれ、呼吸が安定し、体重増加を促進される、
- ② 母乳分泌が刺激され、母乳哺育の期間が長くなる、
- ③ 母子の愛着が深まる、
- ④ お母さんの未熟児出産にしばしばともなう分離感や喪失感などを軽減する、

などの結果が明らかになりました。この頃ボゴタでのカンガルーケアを見学したロンドンの小児科医たちは、以下のようコメントしています。

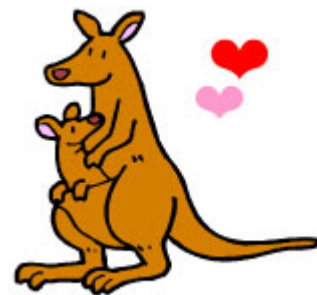
「カンガルーケアは、先進国の未熟児の死亡率や感染率の低下には寄与しないだろう。しかし、われわれはカンガルーケアをロンドンの自分たちの病院で試してみることに決めた。なぜなら、カンガルーケアによって未熟児の体温は安定し、お母さんと赤ちゃんはとてもしラックスした状態となり、集中治療室でストレスが多かった赤ちゃんとその家族において、愛着形成に有効であると思えたからだ。」

そして、1990年代に入ると、カンガルーケアは新生児医療の教科書に掲載されたり、カンガルーケア関連の書籍が世界中で出版されたりするようになりました。

日本では、1995年に聖マリアンナ医科大学横浜市西部病院周産期センターの堀内先生たちが試みられたのがはじまりです。日本の新生児治療室でも同じように母子愛着形成などの成果が認められたことが堀内先生のグループから学会などで報告されると、未熟児に対するカンガルーケアは日本中の病院に急速に拡がっていきました。

すなわち、カンガルーケアは、もともと早産した赤ちゃんなどの治療中に行われるもので、途上国においては新生児医療の代替療法として、先進国においては母子の愛着形成の促進が期待されて拡がったものです。

葛飾赤十字産院のNICUでもカンガルーケアは行われており、ケアが安全に実施されるためにスタッフは定期的にシミュレーション(勉強会)を行っています。早産で生まれた赤ちゃんに、カンガルーケアで愛情とぬくもりをたくさんあげましょう。



担当:副院長(産婦人科) 鈴木 俊治